

家庭生活における「一家団欒」社会史的考察(2)

—— 明治前半期における庶民階層における団欒 ——

佐野 茂

1 課題

小論は明治前半期の庶民階層において家族団欒という家族的交流がどのように織りなされていたかについて教育の社会史という学問的視座から、その史的考証をこころみるものである。

明治前半期という一時代に焦点をあてた理由は、前稿において明治期後半、大正、昭和初期を取り上げたことからその史的連続性を考察するということもあるが、同時にその年代が教育勅語の渙発そして明治民法発布を契機として家父長制に基づく家族倫理が庶民階層にまで徹底されたという同時代の後半とは異なった家族生活が予想されるというところにある。

言うまでもなく明治前半期は近世からの村落共同体が崩壊し、まさしく家そのものが表舞台に登場し、家族関係においても成員各々がより独立した存在として浮かびあがってきた時代であった。社会全体の枠組みは新政府樹立により大幅に改新されたが、庶民家庭における家族のありかたについての規範は近世に引き続きよりおおらかなかたちで営まれていたのではないか。もちろん幕藩時代から寺子屋等を通じて教化されてきた儒教の「孝」を中心とした家族規範や、村落共同体独自で培われきた主従の倫理観念は引き続き家族内でも残されていただろうが、むしろ明治維新による身分、職業、居住地の桎梏から解放されたことにつられ、結果としてより民主的な関係が自然発生的に営まれた時代とも考えられるのではないだろうか。また学制をはじめとして庶民の家庭生活に影響を及ぼす様々な教育制度も導入されたが、家庭内の規範として強く個人を規制するまでには暫らくの時間を要したであろう。このように明治期前半の庶民階層のそれは武士階級とは異なり、上からの制度、教育面からの影響は比較的ゆるやかもので、自発的な親子の情愛関

係を基礎に家族関係が営まれていたと考えるのが自然で、明治後半期とは一線を画し考察する必要があるだろう。

いずれにせよ明治前半期という枠組みのなかにおかれた家族団樂の考証をこころみることにより同時代の後半期、そして現代のそれがより鮮明に浮き上がり、歴史を越えた家族の普遍的本質の一端が些少なりとも明らかになるのではないだろうか。

2 方法

(1) 史的考証の方法

そこでこの課題についての考察方法であるが、まず小論で考えるところの「団樂」についての概念は「家族が楽しく、親和的な雰囲気のもとに食事や遊興に集う状況」¹⁰と定義している。このことから団樂が営まれていたかどうかについて、(1)家族間の共食、遊興の習慣の有無、その時の雰囲気、(2)家族関係のあり方を制度的側面より規定されていたかどうか、(3)家族形態、経済的状况、(4)家屋構造(居間の構造)(5)インフォーマルな形での教育の影響(例えば当時の庶民の教育書の類)等の考証によるアプローチが必要であると考え。もっとも中心的な考証課題はいうまでもなく(1)の家族間共食、遊興の習慣の有無であるが、これらの状況がどの程度庶民家庭において織りなされていたかについて考証することにより当時の団樂像が浮かびあがってくるのではないだろうか。また二次的資料として当時の子どもの取り扱われ方も参考となろう。

(2) 「明治前半期における考証の方法」

本課題における中心的な事項である上記(1)の「家族間の共食・・・」についての具体的方法であるが、最も直接的で妥当性のある方法としてはその時代の家庭生活全般の日記等による体験記録に依拠するのが適当であり、二次的、間接的方法ではあるが新聞、雑誌、見聞録、文学作品等から団樂に関係ある記述を抽出する方法も考えられる。

小論では、直接団樂についての記録ではないが当時の様子について比較的詳細に記録されており、文学作品等に比べればより客観性を含んだ表現として解釈できる外国人の記録(紀行、見聞記)よりその考証をこころみた。もちろん種々の周辺の資料を補足、提示することによりその描写、叙述の客観性を考証することはいうまでもなく、またそこでの作者の論評については距離をおき一考する必要がある。ただ武士階級のながれをひく人物の家庭生活

全般についての記録は少なくないが名もない庶民を対象とした記録は稀有といっても過言ではなくその意味からいって外国人による見聞録、報告書は当時の様子を知る上においてそのもつ資料価値は高いものとする。このような理由から小論では団樂の考証については最も重要である「家族間の共食、遊興の習慣の有無」という事項については外国人が観た当時の団樂に関わる記述を子ども観も含めて抽出しその方法とした。また非制度的教育からの影響についても時代を少し遡るが江戸時代中葉から後期にかけて庶民階層へ甚大な影響を有していた寺子屋での教授内容に焦点をあてて考察したい。

3 外国人の見聞記による考証の方法

(1) 作品の選定

当時の日本の状況を記載した見聞録は数多くあるが内容についての信憑性等を鑑み小論では以下の見聞記より団樂に関わる記述について抽出した。選定の基準としては著者自身が自ら見聞していることと、庶民を取り扱っているということである。それぞれの著名なものばかりで書物についての内容は殊更説明する必要はないが以下簡単に概略しておく。

- ①B.H. チェンバレン(Chamberlain) [英国] 著, Things Japanese, 『日本事物史(高梨健吉訳)』チェンバレンは外遊の途中、1873から1905年まで外国人教師として日本に滞在し、森有礼の後援を受け東京帝国大学の日本語学の教授に昇任。文字どおり日本の事物について詳述し、小論ではとくに「こども」の項目を参照した。
- ②イザベラ・バード(Isabella.L.Bird) [英国] 著Unbeaten Tracks in Japan『日本奥地紀行(高梨健吉訳)』イザベラ・バードは明治十一年六月から九月にかけて約3ヵ月、東京から北海道までの旅行をこころみ、小論では東北地方での日本の風習、風俗、家庭生活についての見聞、記録を参考とした。
- ③E.S. モース(Morse) [米国] 著, Japan Day by Day, 『日本その日その日(石川欣一訳)』1877年から約4年間、東京大学教授の職としての滞在記録。主に東京、横浜、日光への小旅行での日本人の風俗についての観察記録。
- ④C. ムンチンガー(Munzinger) [独] 著, Die Japaner『ドイツ宣教師の見た明治社会』宣教師として1890年から約5年間の日本での滞在記録。

- ⑤ ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn) [米国] 著, Glimpse of Unfamiliar Japan (『日本瞥見記(平井呈一訳)』)

漫遊記者としてのハーンの日本訪問後(1890年)四年間の滞在をもとに書かれたハーン最初の見聞記。

- ⑥ A.M.ベーコン(Bacon) [米国] 著, Japanese Girls and Women

書名どおり日本の女性全般をとりあつかったもので、外国人としては理解しにくかった日本人の家庭内部の様子を見聞したもの。どちらかといえば、上層階層の生活を主にした箇所が多いが、庶民の生活についても観察、説明している。また日本人の子ども観についても数多くふれている。

- ⑦ Griffis, W.E. [米国] 著 The Mikados Empire

1870年から75年までの日本滞在における体験、観察研究記録。

- ⑧ J.J.Rein. Japan [独] 著 1884

プロシヤ政府からの援助をもってマルツブルク大学教授ライン(1874-75年日本に滞在)によってなされた日本旅行紀、探訪紀で一般的には日本の工業、農業、商業、林業について書かれたものだが風俗全般の記述もなされている。原本はドイツ語版であるが英訳版も出版された。

(2) 団欒に関する記述、表現の選定。

さて作品の記述の中からどのような表現が団欒との関わりのあるものとして抽出するかということだが、基本的には、団欒の生成条件と考えられる(拙稿「家庭生活における一家団欒の社会史的考察」参照)⁹⁾以下の項目に関して記述されている部分を抜き出しその考証をこころみた。

① 家族交流に関する記述

小論の団欒の定義は「家族が楽しく、親和的な雰囲気のもとに食事や遊興に集う状況」という規定をしているが、まさしく家族が睦まじく集い、子どもと遊興を共にする状況等の記述、表現を抽出し考証をこころみる。

② 団欒と関係する家庭生活全般(居間、食卓、遊興)の記述

団欒の生成条件として、その本質的なものはその場が親和的な雰囲気にあるかどうかであるが、その二次的条件として必要不可欠なものはそれを演出する物理的な場であり、装置(道具)である。つまり家族を集わせる日常生活の習慣(食事、遊興等)、あるいは道具、(食卓、囲炉裏、灯火)についての記述を抽出し考証をこころみる。

③ 「大人の子どもへの愛情、認識(児童観)に関する記述」

この項目は、団欒の直接の生成条件ではないが、P.H.アリエスが、古い家族は、領地の管理と父の権威を中心として集まっていた。近代家族は、子どもと子どもの将来のために組織される。ところで、子どもはまた、内にとじこもった生活、水いらずの家族団らん「家」を意味する、と論じているように、⁶³ こどもの周囲の家族が、どのような心持ちで子どもと接していたかということも当時の団らんを考証する上で必要であろう。日本人の児童観については多くの先行文献があり⁶⁴ 明治期だけをとりあげ改めて考察する必要がないかもしれないが団欒を考証するうえにおいては必要不可欠な要因であるのであえて小論では列記した。

4 団欒に関係する記述、表現の抽出

以下、以上述べた記述について列記する。

(1) 家族交流に関する記述

①この哀れな道具は行燈とよばれる。このみじめな「見える暗やみ」のまわりに家族一同が集る (the family huddles)。子ども達は遊戯や学校の勉強をするし、女たちは縫い物をする。(『日本奥地紀行』より)⁶⁵

②夜になり、家を閉めてから引き戸をかくしている縄や籐の長い暖簾の間から見えるのは、一家団欒 (the bosom of his family)の中に囲まれてマロ(ふんどし)だけしかつけていない父親が、その醜いが優しい顔をおとなしそうな赤ん坊に寄せている姿である。母親はしばしば肩から着物を落とした姿で、着物を付けていない二人の子どもを両腕に抱いている。(『日本奥地紀行』より)⁶⁶

③夜になると部屋は陰鬱になるほど暗い。小さな皿に入った油と植物の髓の燈心とが紙の燈籠の中で弱々しく光っている。人はすくなくとも燈籠を発見することはできる。この周囲にかたまり合って家族が本を読んだり、遊技をしたりする。(『日本その日その日』より)⁶⁷

④夕暮になると大人たちは帰ってくる。そこであたりはいっそう活気づいてくる。(中略)それが終わると、幼い子ども達を抱いたり一緒に遊んだりする。年長の子ども達は、高い単調な鼻声で明日の学校の予習している。暗くなると、窓や雨戸が閉められ神棚の前に灯火がともされ夕食を食べる。子どもたちは行燈のまわりで静かに遊戯する。十時ごろに、蒲団や木枕が押入れから取り出されて、一家は一つの部屋に横になって眠る。(『日本奥地紀行』より)⁶⁸

⑤ここでは今夜も、他の幾千ものむらむらの場合と同じく、人々は仕事から帰宅し、食事をとり煙草を吸い、こどもを見て楽しみ (enjoyed their children)、背に負って歩きまわったり、こども達が遊ぶのを見ていたり、藁の縄を編み、草鞋を作り、竹をさき、蓑を編んだりしている。中略・・・家は貧しくとも、彼らは家庭を楽しむ。すなわち、ともかく子どもが彼らを魅了しており、・・・(『日本奥地紀行』より)⁹⁹⁾

⑥お茶屋や寺院の美しく整った環境のもとで人気のある草花が満開の時、休日の人々の一群がその美しい景色を見るために装って出かけるのを見るのは楽しい光景である。老いも若きもその顔には幸福と楽しさが映しだされている。それは多くの大人達がお茶や暖かい水や刻みたばこを嗜む一方、絶え間なく子ども達を楽しませることに時間をさいたり、ゲームを一緒にしたり、美味しい食事を準備したりしている。(『The Japan』より)¹⁰⁰⁾

(2) 団樂に関係深い家庭生活全般(居間、食卓、遊興)の記述

①子ども達は両親と同じようにおそくまでおきていて、親たちのすべての話の仲間にはいつている。(『日本奥地紀行』より)¹⁰¹⁾

②おとぎ話についていえば、日本の子供達の心にも大きな貢献をしている。子供達は半分眠りにつき、冬の寒い夜、炬燵の暖かい掛け布団の中で寄り添いながら老祖母や乳母の眠気を誘う声を聞き、海神のいる素晴らしい宮殿や恐ろしい赤いゆがんだ顔で角をもった鬼のよく出る場所に導かれるのである。(『Japanese Girls and Women』より)¹⁰²⁾

③大人たちが子供達のために遊びや害のないスポーツに彼らの多くの時間を用意しているというのは確かなことである。私達は西洋人ならば看過するような娯楽に強壯な成人した日本人がふけているのをよく目撃する。(『The Mikados Empire』より)¹⁰³⁾

(3) 「大人の子どもへの関わりに関する叙述」—外国人が観た日本の大人の子ども観—

①私はこれまで自分のこどもをかわいがる人々をみたことがない。こどもを抱いたり背負ったり、歩く時には手を取り、子どもの遊戯をじっと見ていたり、参加したり、いつも新しい玩具をくれてやり、遠足や祭りに連れて行き、子どもがいないとつまらなそうである。他人の子供に対しても適度に愛情をもって世話をしてやる。父も母も自分の子どもには誇るもっている。見

で非常におもしろいのは毎朝六時ごろ、十二人か十四人の男たちが低い堀の下に集まって腰を下しているが、皆自分の腕の中に二歳にもならぬ子どもを抱いて、かわいがったり、一緒に遊んだり、自分の子どもの体格と知恵を見せびらかしていることである。その様子から判断すると、この朝の集会では子どものことが主要な話題となっているらしい。(『日本奥地紀行』より)⁴⁾

②それぞれの子供は成長するにつれて様々なお守りを収集するがそれは遊興時や日常生活の危険に対して非常に重要なものである。これらは子供の生活につきまとうおおくの災いに対する守護として母親により注意深く持たされる。(『Japanese Girls and Women』より)⁵⁾

③昨晩他の家の2才半の子供が魚のほねを飲み込んでしまい、一日中泣きながら苦しんでいた。母親の嘆きが伊藤の同情をかい、彼は彼女にあわせるために私をつれだした。母親は子どもと一緒に十八時間もうろうろしていたが、子供の喉の中を調べることは少しも思いが及ばなかったという。そして、私が喉の中を調べることをたいそういやがっていた。骨はすぐみえたので、レース編みの針で簡単に取りのぞくことができた。一時間後に母親がお盆にたくさんの餅菓子と駄菓子、そして贈り物としていつも供えられる海苔をのせて贈り物としてよこした。(『日本奥地紀行』より)⁶⁾

④子ども崇拜(cultus)は猛烈なもので、あらゆる種類のお面や人形、いろいろな姿に固めた砂糖、玩具、菓子類が地面に敷いた畳の上に売り物として、並べられている。日本ではどんな親でも、祭りにいけば子どもに捧げるための供物を買うであろう。(『日本奥地紀行』より)⁷⁾

⑤男の子の祝祭日は五月五日に行なわれる。そのとき町や村は巨大な紙や木綿の鯉で飾られる。中略・・・これは鯉が急流を元気よく登ってゆくのと同じように、丈夫な少年があらゆる困難を乗り越え、世の中を進み幸運と名声をつかむようにとの親の願いからである。(『日本事物誌』より)⁸⁾

⑥わたしは世界中に日本ほど赤ん坊のために尽くす国はなく、また日本の赤ん坊ほどよい赤ん坊は世界中にないと確信する。(『日本その日その日』より)⁹⁾

⑦それは日本が子供達の天国だということである。この国の子供達は親切に取り扱われるばかりではなく、他のいずれの国の子供達よりも多くの自由を持ちその自由を濫用することはよりすくなく、気持ちの良い経験のより多くの変化をもっている。赤ん坊時代にはしょっ中、お母さんなり他の人なり

の背にのっている。刑罰もなく、咎めることもなく、うるさく愚図愚図いわれることもない。日本の子供がうける恩恵と特典から考えると、彼らはいかにも甘やかされて増長してしまいそうであるが、しかも世界中で両親を敬愛し老年者を尊敬すること日本の子供に如くものはない。汝の父と母とを尊敬せよ・・・これは日本人に深くしみ込んだ特性である。(『日本その日その日』より)⁽²⁰⁾

⑧私は日本人が、子供達に親切であることに、留意せざるを得なかった。ここに四人、忙しく勘定をし、紙幣の束を調べ、金を数え等しているその真ん中の、机のすぐ前に、五、六歳の男の子が床に横たわって熟睡している。彼等はこの子の身体を超して、何か品物を取らねばならぬことがあるのに、誰も彼をゆすぶって寝床へ行かせたりして、その睡眠をさまたげようとはしない。(『日本その日その日』より)⁽²¹⁾

⑨赤ん坊は泣くが、母親達はそれに対して笑うだけで、本当に苦しんでいる時には同情深くお腹を撫でてやる。(『日本その日その日』より)⁽²²⁾

⑩日本は確かに子供の天国である。そしてうれしいことにはこの種の集まりのどれでも、またいかなる時にでも、大人が一緒になって遊ぶ。(『日本その日その日』より)⁽²³⁾

⑪日本は子供の天国だ。絶対とはいえないが、決して子どもを叩かない。中略・・・子供の心に語りかけることが鞭より効果のある教育法とされているのである。(『ドイツ宣教師の見た明治社会』より)⁽²⁴⁾

⑫日本の親たちは、子どもに対して決して暴君的な真似はしない。みんな猫可愛いがりに可愛がって、だましたりすかしたりして、子どもにはむりに何か押しつけたり、おどしつけたりするようなことはめったにしない。(『日本警見記』より)⁽²⁵⁾

5 明治前半期の団樂に関わる非制度的な教育の受容

さて団樂の直接的な考証の方法はその営みについての史的事実を提出することになるが家族のありかた、形態についてはその時代、体制の社会的要請に基づくところが大きい。述べるまでもなく団樂という家族的営みはその形式としては家族が楽しく集う現象を指すわけだが、その行為の源泉を突き詰めるとそれは親の子に対する愛情であり、また夫婦間の親密さのあらわれでもあって、端的に言えば家族愛の具現であろう。⁽²⁶⁾ つまり団樂を営む一次的

要因は団欒のある家庭に育った子供がそれを体験的に好ましいと感じ、親になった時点においても同じ経験を体験させたいという「親の体験の再生産の願い」と考えるのが最も妥当な説明だろう。⁽²⁷⁾ したがって社会、体制からの喧伝による啓蒙はあくまでも二次的、間接的要因であることを認識する必要があるが、体験を通じて実践しようとするものにとっても教育による後押し・奨励の有無によってはその実践にあたっての程度、頻度に差異が出てくるのではないだろうか。また体験のないものにとっても、教育による啓蒙はその実践を試みようとする端緒にはなるだろう。そこで二次的要因とはいえこのような価値観が明治前期においてどの程度民衆全般に啓蒙、徹底されていたかを明らかにする必要があるがでてくる。

ところでこれらの価値観の後押し、奨励がいわゆる教育一般と呼ぶことができるわけだが、この教育にも社会体制側からの制度的教育と、民衆一般のなかであって口碑的に伝承されてきたもの、そして制度的な側面とのかかわりも強いが村落協同体独自で培われてきたものが考えられる。

明治前期のそれを考えてみた場合、学制発布が明治五年であり、その後同十八年の各種学校令、そして明治三十三年には義務、無償の公教育制度が完成した。しかし明治の二十年前後ぐらいまではまだまだ公教育への就学年限、就学率も低く当時の庶民階層が受けた教育の内容、実態は、幕藩体制の中できずかれていた寺子屋等で伝授されていた初歩的な手習い程度のものであったと考えられよう。⁽²⁸⁾ そしてその手習いの内容について例えば、宮本常一の著作において明治初期の文字習得についての聞き書きの一節があるが、ここでは文字を幼少時に習わなかったものが後年において今川、実語教、童子教、四書などから学習したことが報告されており⁽²⁹⁾、手習い教科書、初歩的国語教科書である「国尽」「七ついろは」等を経て上達次第では道徳書の類等までも進んだことが想像できる。

ここで肝要なことは多くの民衆が文字習得だけではなくその内容についても受容し感化されていたと考えられることである。石川（『藩校と寺小屋』1978）は幕藩体制当時の寺子屋の習字の教育的意義の一つとして「手習う」ことをとおして「ものを読む」ことを教え、「手習いを読む」ことによってその文字や文章の意味を理解するということを述べているように⁽³⁰⁾そこでの子弟は往来物の内容についても薫陶を師匠から教授されていたといえよう。

紙幅の都合上、稿を改めて詳述するが例えば実語教などは、中世以降明治

初期まで最も頻繁に活用された教科書の類であり、明治にはいって修身教科書に引用されていたことを考えると幕末から明治初期においてその影響は庶民にとって絶大なものがあったと考えられる。また子どもへの慈愛という観点からすれば女大学の系譜を踏襲した女子の訓育書についても団樂との関わりを考察する必要もあるだろう。このように、団樂を営むうえでの間接的要因ではあるが、広く庶民階層に広まっていた当時の教育内容の吟味が必要であり、明治前半期でいえば学制以後に整備、徹底された学校での教科書からの影響だけでなくむしろ、幕藩体制において支配的であった寺子屋での往来物の内容が重要になってくる。

Ⅲまとめ

以上、明治初期の外国人が見た日本の団樂の様子について列記したが、当時の庶民階層の家庭生活の一端が伺える記述が多々なされている。小論では8名の外国人からの見聞記を参考にしているが、一様に記述されていることは、親が子ども達と親密な交わりのもっているということである。このことは欧米の家族内交流の流儀の違いから殊更誇張表現されているかもしれないが、都市部においても地方においても日本の一般庶民家庭の内が、決して華美な雰囲気ではないが日々の日常生活の中にも親子が共に向き合う場が多くあり、心の安らぎを感じる場を持っていたように読み取れる。ただ団樂を生み出す装置としての「灯り」は極めて粗末で、チェンパレンが「日本人が早起きするのは不思議ではない。晩は灯火が暗くて楽しみがないからである。」⁽³¹⁾と語っているように「灯り」、「質素な夕食」等の装置の乏しさから日常的には「楽しさ」に欠くことが多かったのではないだろうか。

もちろん外国人の見聞記だけでは事実の一端しか推論できないのだが、当時の家庭の状況を考証するにおいて非常に印象的な、また上述してきたことを象徴するような記載が英国公使館書記のアーネスト・サトーの『日本旅行日記』でみられる。⁽³²⁾ それはある地方巡行での山村の人々を観ての感想で「貧困だが一様に幸せそうだ」という記述である。このことは明治前半期が貧困の先行した時代にもかかわらず、慎ましやかで素朴ではあるが、団樂に象徴されるような楽しい家族交流の場を維持していたことを意味しよう。むしろこの時期を境にして、国家的施策が庶民階層にまで浸透するにつれ、国家的繁栄とはひきかえに、団樂といった楽しい家族の営みはその質的、量的

変化を余儀なくされていったのではないだろうか。

参考文献

田嶋一著、「近世社会の家族と教育」、『講座日本教育史2』, 第一法規, 昭和59年, 20-47ページ。

井上忠司・石毛直道, 『食事作法の思想』, ドメス出版, 1990年。

磯野誠一・磯野富士子, 『家族制度』, 岩波新書, 1958年。

高尾一彦, 『近世の日本』, 講談社現代新書, 昭和51年。

関口裕子他著, 『日本家族史』, 梓出版, 1989年。

石川謙, 『我が国における児童観の発達』, 振鈴社, 昭和24年, 348ページ。

海後宗臣, 『図説教科書のあゆみ』, 日本私学教育研究所事業委員会, 1971年。

引用及び注

- (1) 拙稿, 「一家団欒の概念および教育的意義に関する一考察」, 関西学院大学文学部教育学科年報16号, 1990年, 19-32ページ。
- (2) 拙稿, 「家庭生活における一家団欒の社会史的考察(1)」, 梅光女学院大学論集24号, 1991年, 41-42ページ。
- (3) P. Aries, *L'enfant dans la famille*, "Histoire de la population française et de leurs attitudes devant la vie depuis le 18 siècle," 中内敏夫・森田伸子編訳, 『教育の誕生』, 新評論, 1983年, 95ページ。
- (4) 日本人の児童観については多くの先行文献があり例えば山住正巳・中井和恵『子供の歴史』(東洋文庫版)等において示唆ある報告がなされ、改めて明治期だけをとりあげ考察する必要がないかもしれないが団欒を考証するうえにおいては必要不可欠な要因であるのであえて小論では列記した。
- (5) Isabella. L. Bird., *Unbeaten Tracks in Japan*, John Murray, 1905, p.73, 高橋健吉訳, 『日本奥地紀行』平凡社, 昭和48年, 84ページ。(以下 *Unbeaten Tracks in Japan*, および『日本奥地紀行』と記す)
- (6) *Unbeaten Tracks in Japan*, p.75, 『日本奥地紀行』, 86ページ。
- (7) E.S.Morse., *Japan Day by Day, Vol.1*, HOUGHTON MIFFLIN COMPANY, 1917, p.183, 石川欣一訳, 『日本その日その日』, 162ページ。(以下, *Japan Day by Day* および『日本その日その日』と記す)
- (8) *Unbeaten Tracks in Japan*, p.74, 『日本奥地紀行』, 85-86ページ。
- (9) *ibid*, p.185, 『日本奥地紀行』, 211ページ。
- (10) J.J.Rein., *Japan*, Hodder and Stoughton, 1884, p.426.
- (11) *Unbeaten Tracks in Japan*, p.75, 『日本奥地紀行』, 86ページ。
- (12) A.M.Bacon., *The Japanese Girls and Women*, Gay and Bird Press, 1905, pp.32-33.

(以下、The Jpanese Girls and Women と記す)

- (13) Griffis. W. E., *The Micados Empire*, Harper Press, 1876, p.453.
 (14) *Unbeaten Tracks in Japan*, p.75, 『日本奥地紀行』, 86ページ。
 (15) *The Jpanese Girls and Women*, p.329.
 (16) *Unbeaten Tracks in Japan*, p.104, 『日本奥地紀行』, 120ページ。
 (17) *ibid*, p.171, 『日本奥地紀行』, 195-196ページ。
 (18) B. H. Chamberlain, *Things Japanese*, Kelly & Walsh, limited, 1905, p.93. 高橋健吉訳, 『日本事物誌1』, 平凡社, 昭和44年, 118ページ。
 (19) E. S. Morse., *Japan Day by Day Vol.1*, p.10, 『日本その日その日』, 11ページ。
 (20) *ibid*, p.41, 同上, 37-38ページ。
 (21) *ibid*, p.228, 同上, 202ページ。
 (22) *ibid*, p.245, 同上, 216ページ。
 (23) *ibid*, p.299, 同上, 2巻18-19ページ。
 (24) C. Munzinger., *Die Japaner* 生熊文訳, 『ドイツ宣教師の見た明治社会』, 新人物往来社, 昭和62年, 124ページ。
 (25) L. Hearn., *Glimpse of Unfamiliar Japan*, Charles E. Tuttle Company, 1976, 339p., 平井呈一訳, 『日本警見記』, 恒文社, 1975年, 437ページ。
 (26) この家族愛というものが人間独自のもつ生来的な感情であって時代を越えた普遍的なものであるかもしれないという仮説を認識しておく必要はあるがその大部分は後天的な学習によるものとはここでは考える。
 (27) 一般論として日本は古来よりきわめて子供への愛情の厚い社会であったと考えられ、上述してきたように明治初期においてもその事実がみられた。仮説にすぎないが明治期初期に家族の団欒がみうけられたということは、それを営んだ明治期前期の親の幼少期も親の世代を通じて同じ体験を経験してきた世代ではないだろうか。このことを敷衍していくと、日本社会が古来より子どもへの愛情の強い社会と仮定できれば、程度、頻度の差はあれ団欒という営みが日本社会において連続と引き継がれてきたという仮説は成り立つ。
 (28) 明治20年の就学率は約45%でそれから推定しても、地方の年長者、女子においてはまだまだ文字との関わりが日常的でない者が多数派であったと考えられる。
 (29) 宮本常一, 『忘れられた日本人』岩波文庫, 1984年, 48ページ。
 (30) 石川松太郎, 『藩校と寺子屋』, 教育社, 1978年, 210ページ。
 (31) *Unbeaten Tracks in Japan*, p.73, 『日本奥地紀行』, 84ページ。
 (32) Earnest.Satow., 庄田元男訳, 『日本旅行日記』, 平凡社, 1992年, 92ページ。

以上